



新刊

計古之部

九

津田文庫
文庫 1
1604
10



倭訓琴前編九

洞津 谷川士清纂

計の部

け 氣とけとよむ訓也潮氣火氣れ如く音又つとす○食饌等とよむ
 字より出で熟食とよむ小の形とよむ又うけの略成へ一物けたけ
 ひらけちとよむなり○奇なげ強げらふげめづしけなむいさほ
 りとあり風を摸せし辞○毛も氣とよむとよむの氣はひさや天毛と
 ぬく毛とよむとよむ事とあり皆聲也氣漸く成る也信濃は毛は六
 七片ある暴雨の毛とよむとありとよむとよむとよむとよむとよむとよむ
 とよむ○日本紀より此事は匹とけとよむ毛は毛とよむ○稲も毛とよむ八秋
 りといふ又土毛は毛といふ○本とけとよむ日本紀は本此云開とよむ
 通音と○箭とよむい合よりいさう盛食器也とよむう万葉集はあり
 けいけふとよむいさう日本紀の奇は玉箭とよむいさうとよむとよむ又
 箭飯ともいさうとよむとよむ

四方は海と云ふにけしと海をさん付とや海をさるも也
 けけもまゝ同一と云ふに神社は酒此の器をけと呼ぶと云ふ形今此の
 う此の〇消と云ふはさえ反けく伊勢物語は消き清きんと見ゆ〇日本紀
 万葉集は殊又異と云ふは惟此音より借用しと云ふ一伊勢物語はまゝ
 了け小物そむりしと云ふ今集は病よりけり権の^{イカサ}病と云ふハ勝字此
 言わくへしと云ふ万葉集はまゝなり〇削とけつと〇藪にけれ也〇蹶と
 けり〇本と云ふはと云ふ〇源氏物語は故といふべし城けといふかき
 反け今も色鄙と云ふ故といふけといふといふ〇源氏にけけと云ふ今
 見けを引きたり界此音あり朱子文集は界行と云ふは行はなり也延
 喜式は欄界と云ふは國史補は鳥絲欄と云ふ是大神宮式は花形塊
 打ともんゆ〇折目とつけておとるを折界といひ白けと引と^{カウカヒケ}并界といふと
 といふ後世扇界此制なりまゝは^{イカサ}廣狭と云ふ便寸墨莊漫録は日本書皆
 作粘葉上下欄界出于紙葉と云ふ〇碁盤中此線道とけといふは罪字
 也方罰とも云ふなり

△けあ

△けい

源氏に尼ゆ家司也といふ又下けいとも云ふ〇枕草紙にけい
 づいと云ふは殿子此音也倭名抄山槐記も云ふ〇撃子といふは御
 飯此土器此下と云ふといふと

けい

〇齋にせと云ふけいといふとも云ふ〇わろくと云ふかぐらといふ

△けり

源氏にみゆ希也此音也維摩經に尼由常と希有希見といふと云ふ
 日本紀にめつと云ふ〇源氏に興もけいと云ふ〇と云ふは又孝
 と云ふといふ孝養と云ふけりといふなり

けり

靈異記に舗と云ふり食人此音なり
 けり〇源氏にまゝと云ふけりといふはけ河海は氣疎此音といふなり

△けえ

源氏に吹毛求疵と云ふ書言故事に求多端といふは後撰集に
 ありあり曲る枝と云ふは毛と云ふは派といふなり

△けぬ

源氏に吹毛求疵と云ふ書言故事に求多端といふは後撰集に
 ありあり曲る枝と云ふは毛と云ふは派といふなり

△けが 穢きの暗也俗はけがらちをいふと身と傷とを血とらやと云ふりて
ける御言へ一虧瑕の音ともいふ又怪也とも云ふ○けが此國の系列なり

けがま 觸穢といふ字枯れぬぬへ一日本紀も濁もあり○けがすとも汚穢
ともいふと流もあり靈異記も黷と云ふ神代紀も放戾とけがしすとあり

○祭祀は穢を忌む事也邦特りも一死穢の火此事の神代紀も云ふ
凡のさうけりてけがれといふらや物傳も云ふ説文も姝婦人汚也漢律姝

変不得持祠と云ふらや実を喫ぬの穢は延喜或ら云ふて太古も神饌も
獸ともいふと今もいふ○流物草は法令も水火は穢と云ふてす入物

ら汚と云ふらと云ふら故やわらう
けがらら一 神代紀も穢矣ともけ穢とも濁穢とも云ふら一反ひてけがらら
ともいふら反るらけがらともいふ

けぎらう 氣清らと云ふ草部も云ふ
△けく うけつとけくわけと云ふけくもけくも云ふらと云ふらと云ふら
何と云ふけくともいふらと云ふ也又けく反らや

けぐり 玉系も云ふ童れなる皆やうといふ毛皆くあり又軍用もいふ
て制衣かきと云ふ

けぐるは 糸毛也車といふ
△けく 平氣物傳も馬もけくで芥下と云ふらと云ふらと云ふらと云ふら
盛衰記もいふらけくも云ふら今もいふら糸履也○全浙兵制も僕人と譯

せり下と云ふぬへ一今も云ふと云ふ
けくも 源氏も云ふ今もいふらと云ふらと云ふらと云ふらと云ふら

けくも 古今集も云ふ古も甲斐文詞も云ふらと云ふらと云ふらと云ふら
倉右大臣集もけくも云ふらと云ふら今も云ふらと云ふらと云ふらと云ふら

△けご 伊勢物傳もけくも云ふらと云ふらと云ふらと云ふらと云ふら
いふらと云ふらと云ふらと云ふらと云ふらと云ふらと云ふらと云ふら

せんともいふらけくも云ふらと云ふらと云ふらと云ふらと云ふら
けごも 食薦ともいふ大嘗會も神食薦もいふらと云ふらと云ふらと云ふら

とつけともいふら

けごりも 褻服といふ方多きものあり、毛衣は兼御袴此服也毛衣ハ西土
といふ又海苔は名也といふあり

しるがわら昔此毛衣をてんてんからけりのまごつたり

△けさ 今朝といふ此めさ此物り、つらぬきり日中記は明旦古事記は今日
さあり○けさ反り也さやけさ又此どけさの類也○袈裟ハ不色と譯す
正色ハ形をいひ又功德衣無垢衣とも翻せり

けさやう 源氏ハ元氣亮此兼あり

△けしき 氣色此音也源氏ハけしきをみよるハさきさき○源氏
物語ハけしきさきさきと云ふ○口語ハいふ氣色此兼あり○万葉集
ハ愛情をけしきと云ふあり○氣色此杜ハ大隅也

けしかる けしかる縁ぎけしかる女けしかる縁がふせや、撰集抄ハ元盛
表記ハけしかるわら、小袴平氣物語ハけしかるかきす急屋形舟わら
るる、けしきくわら、くわら反り也、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、
ぬらぬら反り、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、

けいかくふ 在佛ハ喉夫整と云ふ、けいハ使大色と云ふ、氣為ハ此兼あり

△けいす 消とあり、さえ反り也滅も同、出羽ハさきえらと云ふ、けいすといふ

けいすら 擬とあり、けいすといふ、体源抄ハ今兼此、御新樂ハ此、けいすら
ひて、御拾遺集あり

けいさほら 枕草紙ハ元氣冷此兼、今語ハさきさきと云ふ、けいさほら

△けいせ 源氏ハ元氣家扱此兼、此さきさきと云ふ

△けいせん 方さきさきハ此、精進也、謙ハ玉篇ハ方也、と云ふ、○桁と云ふ、けいせん

△けた 方さきさきハ此、精進也、謙ハ玉篇ハ方也、と云ふ、○桁と云ふ、けいせん
と云ふ、又、けいせん、井、けいせん、と云ふ、○桁行をいひ、けいせん

けいだー 神代記ハ蓋字と云ふ、て、漢書ハ源ハ蓋語、辞也、と云ふ、新撰字鏡ハ
儻字もよめり、源氏ハ此、けいせん、と云ふ、けいせん、と云ふ、けいせん、と云ふ、
けいせん、と云ふ、疑ハ、けいせん、と云ふ、性理群書ハ補源ハ不敢決、と云ふ、けいせん、

といふこと也といふ孝経乃注蓋者稱辜較之辞也述義は辜較猶梗概
大略之語也といふ蓋言と連用の文多し

けさぬ 消さぬ又同一けさぬなりハ火はあてい

けだもの 倭名抄は畜とあり毛田物此を牛馬此をけさぬけさぬ列

糸を或ハかけはれともあり○古今集の長奇はけさぬとけさぬは

えんといふとあり○雞犬此は藥をけさぬてまぬは此あり一准

南王此は事也光孝夷孫は臣將隨陛下為雲中之吠犬といふ

けさぬ 倭名抄はハ内儀は尋く事ハ消魂此を

△けち 伊勢物語此をさしけちといふ消す此を新撰字鏡は燼を

火けちといふあり○俗語は物といひけちといふ源氏にけちてとい

さう○あやしと事といふ此事此音也○源氏をさしけちといふ

けちハ此音也其れはあさしと事といひけちといふ亦同也

けり 下知此字日本書紀三代古事記に下知此をさしけり

けぢめ 異路目此をさしけぢめをぬるといふ源氏物語に

ねと竹とのけぢめをさしけりといふ

△けつ 消さぬハ多くけつといふあり○狐ともあり三狐神の語なり

けづふ 削字をさしけり削字も同一毛出る此をさしけづハ鏝也新撰

字鏡は銚又鉦といふあり鉦ハとも訓は梳のさしけり○倭名抄は梳ハ訓

けづるといふ今ハけづるといふ梳草源氏にけづりといふ

新撰字鏡は梳をさしけりけづるといふみちのけづりといふ

けづけ 公事根源白馬節會はけづけの奉といふけづり毛をさしけり

義とすはと東澄は馬毛針と云てけづり毛をさしけり又日本紀は馬ハ

匹をやけけと云ふハ馬此をさしけり

けづりハ 江波書は蓋者物暑月削氷甘瓜等ハ首をさし粉熟又加削氷列見延

引及暑月時如之といふ削草紙をけづりハ此のまづけりてさし暑熱は後をぬ

とめれ用○博物志は削氷令圓奉以向日以艾葉其影則有火而生といふ

けづりハ 古今集は尾のけづりハ作り物ハ新撰古今集は尾のけづりハ

いハ延喜式所傳名傳ハ菊削花二枚と云てけづり新撰古今集は尾のけづり

倭名抄

りかゝるをけづりむしけりゆりよかたなりとみまへしと作りしゆ
とも思へり蜻蛉日記よか削本も同じ時申も削本あり菅門戸
挿ハ家時記よむつとて柳とあり今蝦夷此風俗人死すと云申は葬り
柳枝をさると挿む枝ハ末を細く削り茅を此めくは神をあらめ
是と云と云つり粥杖此條合せ考へし京師除夜此紙を此ぬり削掛
も同じぬへし多く抄を用ぬ龜足も同じ

△け

△けぢらるゝ 浮気よ名ゆ氣とさるまぬはまなり

△けあけ 歌介此氣象よか怪无氣此氣ぬへしあがげはとつうこ
けあかく 氣長也日久しきさきもつう万葉集も多しゆめり戦国策大

息の流は長出氣也と云つり日本紀は氣長と云さるあり

△けよ 古今集あつるけよ又ありしけよと云つりけよと云つり
字異字殊字と云めりここと云つりあり○四国の辺此口語は碎の終り
けふと云ふこと多くゆゑふと云ふあり

げふ 實字と云めりつり頭乃字音といふいふ定家此流よまてに
さつたりといふゆゑげふといふこと思へり

△けぬさ 鐻といふ倭名抄よゆ毛抜れぬし松葉紙ありがさ物の神
ろよくぬけらけぬさと云ゆ○とあげぬとも倭名抄よ思へり○東常
名目よ毛抜形の太力なり

けぬうへ 不消う上此義と雪よあり○寒具よゆ氷室香也といふ

△けの 毛野ハ此名抄よ下りよと云つりし和名抄よ上野かつけの下野也
つけはと云今此かつけあもつけ是し古今源流は坂東ありがら此雲より東

いと心なとも結くす結くさるる也

けのつゝもの 神代記は毛鹿毛素とけのつゝものけれぬと云ふとあり禽
獸といふなり

△けそひ 氣そひは義そひハ助産也源氏抄は形勢と云ふ新様集は
氣氣と云あり○けそひは相列より鎌倉扇より谷比西也又去和泊漱

つりて齋宮此故趾なりとぞ

けぢや 盛衰記に裝束けぢやとありとより氣迷此けぢやとありとあり

けぢれ 儀よけぢれとありぬかとより製此時暗の付ると記源よんこり

とより法例の音也續日本紀は一日法例と云くつうハ今日ハ一日と此れ

此事よもつぬ申あるとより暗襲る常と云はぬゆへと云くつう

けハハ 嶮と云ハ新撰字鏡は岫もよありと云く氣悪きや若草集

とまりつう湊此風もけぢりきよ流るこ此浦ハいかりと

けぢひでん 澁書よつ湯沐邑也俗よけぢひ化粧と云くつう此名目也云

と田此音也查田とも云くつう

△けひ 氣比と日本紀は筭飯とまり万葉集よりけふと云ひつとありと

なり御饌津神と云くつう名にこころ加へ越前敦賀郡也○大宮司

氣比氏治子齊暗とも小南朝此名也

げび 上びよ射して下びといふ俗語也みやびひのびらふらぬとあり及ひ也

△けふ 今日と云はけ日此義と云けとひと云と云せり万葉集よんゆ又こ

と云らハ菅美は當日も云あり○狭布と云くつう音と略と云はれん

ぬちと云ハ文選讀はぬと後拾遺集よぬちをぬちひとありと云

云くつうたふのせがぬともいふと云はれぬのつりよハ田と種を服は製と云

アぬらと云くつう弘仁元年の官符は應陸奥國津浪人准土人輸狭布

事と云くつう舎澤風去記は細布出押北郷と云ぬ今布此名といあり

是なり○薩摩よん名といふと云はれぬのひけふ此名ハ此常

とゆかりと云くつうとあり

けぢり 煙と云あり氣振の義也とよりゆたよはけひと云くつうハけひ

アと云も云す○おまひのさありハ思ひと火よと云くつうハけぢり

つうハなともあり○水けぢりと云けぢり湯ありと云くつう○湯成まゆ

れつと云けぢりといふハ白ひやと云くつうと云くつう○同云ハ此めもけ

ありと云くつう又と云けぢりわと云くつうと云くつう指ともれと云くつう

とれ可よと云くつう新撰集

當と号しそけ下を冠びと呼しとそ

けんたつ 見當れ家之晋書は準望と云くなり或ハ見頭と云り○鉄炮は名所をとり

げんぶく 元服ハもと冠は事なるをて首服首飾をともいハ加冠理髮能冠なり此後ゆりて初冠をともいハ後ハ初て月代して丁男ともいハつハ世風よきとていハてき後を混しつハ初と云なり○中右記ハ天皇御加冠者必大政大臣けりるなり凡て堂上ハ元服ハ筆力タカクサカチにて髪は束と云るまで此事也此を理髮と稱す

△けめ 語の辞より日本紀は可なりと云り

△けもの 倭名抄ハ獸と云りあり毛物の家ハ畜をけものといハれり今俗野獸とけものといハ畜産をけものといハるハ及せるハ似て神代紀の訓也西訓まハ一語ありへり○鈔ハ牡をけもの牝をめけものといハり○獸卧下マ尤といハ事也延喜式より云り○耳けものハ馬也六月後より高天原より耳振立聞物と馬牽立て聞食と白すと云り

けものたふ

六月後の文ハ畜什志シ蠱物為罪と云くあり人殺ハ畜ハ

六畜の病死と云災也又ハ虐の不道と云造畜蠱毒と云くあり史学指南より造畜ハ猫鬼を傳畜はねといハ大神蛇神はねといハ也賊盜律ハは蠱毒をけりたくと云くあり

△けやけ 尤字と云り惟と云くあり辭書より日本紀ハ異字も云り又お切をけやうと云り是やけおといハり

△げゆ 解由と云り日本紀竟宴は奇と云くあり○今外の官ハ幼解由はげゆ陳諤為字正滿替性廉司取解由と云り○今外の官ハ幼解由はげゆ

△けりー 万葉集ハ本トとけりしと云りあり

けらく 續紀宣命ハ謀家良久と云くありけらく及あり○快樂は音といハり

△けり 笑といハ快樂は音といハり○快樂は音といハり○快樂は音といハり○快樂は音といハり

紀の宣命ハ云來久とも云來流とも云くありけらく及あり○辭はけり小

△こが 下字等、楹とくみ桶也と流やう今に必辺とて酒桶といふ○伊
 勢珍麻耶久我村のりこがと呼平資盛の配所之下總のこが古河と云う
 こが 金と云ふも黄金此を俗に黄金と音と云ふ大判也○本草より
 波斯紫磨金東夷青金と云ふ青金六日此産と極や紫磨黄金といふら
 孔融の聖人優劣論は金之精者名曰紫磨猶人之有聖と云ふ埃囊抄り
 須弥山此頂に閻浮樹の蔭に金と云ふ此流より閻浮檀金といふ
 こが 万葉集より

とめろと此流代さうえんと云ふとちかくふこがのむさく
 續日本紀は陸奥國始て黄金と九百両貢せし事なり延喜式も陸奥
 より毎年砂金三百両貢せし事なり神名式は小田郡黄金山神
 社と云ふなり金美此名を金美と云ふ水精の大きつ丈なりふのね
 りの仙臺も陳子昂より春日登金華觀詩は白玉仙臺古といふなり○
 延喜式は下野より毎年砂金百両貢せし事なり勝蓮此
 初め駿河多胡浦の濱より知と云ふなり慶長此地より石見伊豆南部より

も出て後略し○依後より金と云ふ事ハ字源拾遺よりなり○
 こがのむさく根也○こが此より大和の金美山といふ也○も黄金なり
 より字源拾遺よりなり

こが 林代紀は養蚕と云ふ事ハ搜神記は世或謂蚕為女
 児者古之遺言也と云ふ雄略天皇蚕を聚めさせしめらば螺蚕といふ
 人誤て嬰兒を聚めたり○事日紀は名と云ふ○小貝此名も師光前
 いせ此海流に流る物と云ふみやこれつと云ふ小貝切なりん
 こが 焦と云ふ事ハ大和匡房煇史乃記也

○高まこがといふも同きとて流源より流源こがといふ
 こが 本流此名なり本流より流る風をかこしと云ふ音便也五
 十嵐といふと云ふも同一字書は風過木上曰颺と云ふ嵐も同風ハ
 倭の俗字也○高ま冬より又秋も云ふなり野之高合此順の刺は
 六帖の高を以て流せり○高ま此流より流る六帖也

人志まぬなりひさるふれまよこそ月とみかしく杜はけりけし

△こころー 日本紀はまよとあり又こころとてんくさり皆卯ふれ王を訓
やり杜氏通典は百濟王号於羅瑕百姓呼健吉支夏言並王也とんころ
こきたーく 聖武紀はまよとありあたくとてんくさり一万余集りここ
たくとんころ

△こぐ 舟とこぐなと漕とよめり万葉集は多く榜字とよめり字彙は榜
進舟也とんころ又水手とよめり訓之源氏ここまひてとんころハ
漕迎ら多し○倭名抄は名は漕代とていふとあり古くからあもはなへー
こぐち ぬまはゆ小は袴也古はよひててり埃叢抄はまよと此袴の附小は
の袴袴とめぬ袴はよらとてめ守にまよとんころ○本はまよ口語まらり
こくみ 倭名抄は瘰肉とよめり濃膿はまよとんころ又く也何多くとよめり餘
肉はまよと申は袂もまよとこくみと属たり白癩黒癩は天刑病とらり
こくのもの 源氏まよの樂曲といふなり○こく此はむひハ捨棄集りまよ
玉帯はまよ

△こけ 古事記は蘿とよめり倭名抄は苔とよめり本毛はまよとて一或は苔と
よめり韻會は苔也とてぬ○苔は水衣也とてなると地衣草もいり又
石衣とちいさなこけとよめり石髪も同く東坡詩は空餘石髮挂魚衣と
いふ水衣もいふといふ一又松蘿とすらのこけ屋遊をやのれこけとよめ
る○こけはこけ席をともみとてある詞は苔は神苔は袂をともつり
とあり苔は此戸苔は席をともみとてある詞は苔は神苔は袂をともつり
あり庭の法師はこけとよめり

漬くとよめりや又汲人もいふとありまよとてんくさり此はまよ
○兼久は此は甲斐宰相範義自水此附
おとひとや苔は下水とよめりおとひとてんくさり此はまよとてんくさり
○俗は難けり苦けりけのひといふも苔はまよとてんくさり
こけふ けろとてんくさり代経は漏落とてんくさりおとひとてんくさり
とらり○こけはかきとてんくさりおとひとてんくさり
こけら 倭名抄は林とよめり木の削屑といふ削下本行とてんくさり○

苔とけらとものから助語也情吟日記にけらつひさ松の松とてあり
万葉集より折取蘿生松柯といふも同し

けのみづら 苔と贅まんにまゝ浪洗舊苔類といふもけり堀河百首よ

年より苔其うらとゆひひて苔其姿を神さひよりか

けけらぎぬ 雲霧此言まじかけの苔なりとねれり云々

と故のなかりへ

△く 神代紀万葉集よばまじあり○皇代紀は此鳥又於是又於馬と

ありとあり於馬ハ小雅白駒詩よんゆ左傳此晋鄭鳥依此鳥を國語よ

此又けり淮南子天子鳥始乘舟は鳥猶於也といふて語助と

けり着てて禮記乃故先王鳥為之立中制節此鳥も同し於の一字と

もむも同し又云曰爰粵越言とあり肆聿安於于薄も同し書けは又曰爰

也粵ハ越も同し言ハ詩の朱注よ辞也といふ肆ハ書よ多し爰も同し肆

ハ師古注よ曰也安語助とほそ此者茲者も訓同し

くろ 心とて火凝れりといふも通と神代紀よんて云々

也又火藏ともをり物終るもいふも多し此をさるるて神

代紀万葉集も情とらると又らるるをさけといふも多し○

心なりといふもやうあるといふも見ゆる事あり○取明寺入りのやう

我夜たりひささめてかちんといふもさるるあり

祝无功曰庖羲一畫直豎之則為一左右倚之則人為縮之則為一曲之

則為二二圓而神一一ノ一方以直世間字变化浩繁未有能外一一

ノ一結構之者獨心字欲動欲流圓妙不居出之乎一一ノ一之外更索一

字與作對不可得

くふ 万葉集よ凝字とてけりといふも寒凝れぬく靈異記よ煮鯉寒

凝といふゆ今もいふも凝り難きといふあり

くら 万葉集よ裁許とありあるたも同し一雲沙抄よ多しこと宣ふ

あらしをくらけ等も多しといふ辞

くろを 心集とてり大嘗會よ冠のころ懸るものくろをさるる此枝

をさるる神代紀よんて桃花葉をよ心集ハ金銅此梅を

安代 卷之九

とてくもあま某大嘗會此奇此き海もきんく今主上ハ極北捕頭を銀
 まで遠家大員藤大中納言ハ心欲參候ハ梅もさし小滅金を申す○源氏
 物語ハ刺櫛の宮此公繁又艶まき記さる沈此管も同し之を此き女情
 冷日記ハ新ひともひまたま物入て公繁梅の柱もくく類聚雜要ハ圖
 けり是らハ同公結より記りたる也簡齋集梅花の詩ハ同心不見昭
 儀種五出時驚公主花ほは趙后外傳ハ飛燕加大跡昭儀奉三十六物以
 賀中有五色同心結一鞞と云えさりめてさる物もさるをて家晚此
 魄遺ハ醫人ハ同心結を用ふ事ハ熙朝樂事ハ云々○む鳥ハ天曆
 二年春也宴ハ御膳の折爰公繁友むさくを代歩お物折爰此四隅ハ糸
 金とて松枝とて糸とて糸代結ひて鶴と結りてさる事あり是心
 多れさる也とも云さる○拾遺集ハ物もまかりり人此をたぬさ結ひ
 袋も入てつらと云

減くぬちさる結ハ糸も糸も向の結もあへかりあり

つたたく 新集ハ幾許さるみ又あたらもさる中後後あもさたく

此罪と云さるりそとあといふあて物の多き事ある略さてついで多き
 事よわりもあま某り多したたく通ひて同し癖きあたくともさる
 うたへ 九重也禁中といふ楚辭ハ知さるは天子九門と云り又九天ハ
 うへさるうたへさるもいふ一條さる九重もて用さるも同し
 うたへ 九日といふ大井川行幸和帝席もさるゆのつ及ぬ
 うたへ 九とあり疑の義ハ方此申央とてさるぬへー又いさるよりこく
 此義とありさるや

うたへ 意を訓せり東鑑ハ公瑞とまり日本紀ハ景迹を訓せりま
 心操ともさるり
 うたへ 志を訓せり心指ハ義ハ心之所定也と云さるり
 うたへ 日本紀ハ意字も意氣立操心許さるさるめり心映ハ義
 かなへ
 うたへ 人と都と心を易也古今集りさるり列子ハ既已変物之形又
 且易人之慮と云さるり玉葉集り

秘をそよぎあつち入ておれやとさふもせせしる
 あらやや 源氏よ心をやまらばわらみゆ新撰字鏡よ跳躑を心やるとよ
 然り遣情此を心懸也と云うちわわ修よ
 片岡よ藤よ先正のあつちあつちやうや若葉つまらし
 あらやや 日華記よ厝懐をさるり源氏よ多々之詞をされと日華記のま
 心を急する事也後撰集り
 今ハそや打さけぬと白痴此をわくまておとやハはけ家
 とよめる是く源氏よいふいふ其處置と云う
 こゝろやま 詩よ我心痛と云うり伊勢物語よ心をさうり後正集り
 ねすつれと心をかたけおの心やまらと心あつちあつちあつちあつち
 こゝろはいて 枝是于茲と云うあり於ハ於是此物と干干此物此物と
 粵ハ於是也○於是の時ハ是字は限るより於此の時ハ此字は限るより
 こゝろあつち 源氏よ日華記よ是字有意字と云うありあつち
 知也らひ及ん

こゝろあつち 源氏よ秋の心をさうと云うと標此をぬへ金葉集り
 ぬきとつちあつちこゝろ小新中よあつちあつちあつちあつち
 こゝろあつち 日華記よ丹款と云う赤心此をさうて心を創るり
 心底此字謝道と辞と云うり
 こゝろのこた 心曲也詩よ乱我心曲と云うり後撰集り
 人よから心此をさうと云うて法華講をいかにさうん
 こゝろあつち 源氏よゆ列子注よ疑心生闇鬼と云うり正法念經
 中も閻羅獄卒非實有情以衆生妄業力故見之と云う謙徳公家集り
 心よあつち心此をさうかふ心この鬼もさうれ
 こゝろあつち 心丹國也抑も滞り結つて云う儒よ誠意此人鬼関り
 釋よ悟道の無門圓り
 あらやや 心此を也圓覺經よ心華發明照斗方利と云うゆまらつち
 こゝろあつち 心友也抑も心此を也面友と云う明心寶鑑よ古人結交唯

結心今人結交唯結面と云々

わづけやをさるるのしづかきうてういふへのまれば乃ね

戴安道之故事をまめり

うろともや

伊勢物語よりゆきとちり一方第集より云々

わさぬやをさるるのしづかきうてういふへのまれば乃ね

吾心已許之よりゆきとちり謝靈運之詩は延列協心許とも云う正字

通は許所也といひ謹書は心本とも云う

新撰宮鏡は忙怕さるるのとあがるともあり

○心胸のゆるきをゆるす

いつらゆもゆるるる

九枝燈といふ朗詠集は九枝燈盡唯期曉江次方より

漆燈臺九本於佛机四方四角中央謂之九枝燈と云々

母來時有九光燈とも云う東鑑は挑九枝とも云うて七夕夜より

めり又七枝燈より字齋伯俾ると云う

○孔明九曲燈も同じと云う

うらわひのかげ 燈馬樂より云々風の名なりといふ

又申是れまのしづかきうてういふ

心はひれ風をたかかせ八字と云ふ

うらまもやね 無恒の萬事世間運もまてり

あやあやと云ふ

△こころめ 日本経より微雨倭名抄は細雨

霹靂蒙頌韻は蒙ともあり

こころめ 燈馬樂は人の心より零れぬと云ふ

是は幻術也又海へ入て後深かりて燈をたかき

樹陰をさるるのうらまもやね

こころめ

△こころめ 紙のぬれはぬれぬと云ふ

りかてり或は紙後古志耶より

ろかてり或は紙後古志耶より

言也○腰といふは襖の裏に上下に要處也○腰に於ては二重なることあり

○色は法也○裝束は小腰引腰といふ事あり○輿を訓む

○輿と訓むは朝野群載齋王の處に輦輿一基腰輿一基といふ又四方

輿手輿張輿腰輿り靈異記に輦輿もあり瑤輿ハ親王家暗の時ハ白

輿ハ親王攝家清華大臣にあり又半切とも稱しとも官家の

りり又板輿り通鑿はるゆ約げあり又半切とも稱しとも官家の

めり流るる婦人此物也今公卿夫人ともも是をめす也○足利の時

三家ハ吉良石橋澁河也此ハ長柄の倉輿免許也當代此倉輿ハ彼例な

りしとて○倉輿ハ四方輿の代り也當時ハ車代といふは武士每儀輿

は廂ありとて包を荷輿といふ地にも用り○後名抄に舟具に櫓とい

ふは層と塔のうといふあり紙の裏に新撰字鏡に日本紀に九重

塔をうたへ此塔といふあり又字鏡に鋪といふあり物に厨子二階あり
よれうたのうといふ是也

こト 巾子也信子樂よんといふ倭名抄にハえといふ宋史輿服志

に僕頭巾子といふ冠此冠は巾子の入るをいふなり○天子の

金巾子ハ御冠といふ令紙をとり巾子と包といふ也元服は披巾子ハ

冠といふ冠の巾子と披放しといふもの也○居士ハ禮の玉藻に巾

子謂道藝處士也といふ居士といふは隱者此稱に宋に政和中

道教乃官位と定めしむ居士と從七品此官は佛者已に事とて

ねとを官の人を稱しとて事あり法華楞嚴に疏にも名教典雅此言を

する者といふははるがれ事あり今居士といふは居士と稱しとて

たは名をとりて室町家此附よりといふは將軍の御所あり

こト 甌といふはかきとて煮飯器也といふは紙を煮たり

といふ又甌もといふ延喜式に櫓字を用うといふ櫓也儀式帳より

古曾伎といふあり○新撰字鏡にハ燉といふは本草に甌蔽といふ

醜とてしつとめり簀うとてあや○倭名抄に醜帯とてしつと
るる今月月の輪やちぬれ炊單衣也○万葉集にうさ小蜘蛛
のちかきとてしつとめりあはれ体とてしつと○后深屋の時沙殿に棟より醜とま
るるのりり皇子をねの南へ落し皇女をねの北へおとすはるるあはれ体
るる流御衣よ沙胞衣とてしつとあはれ也大和此里にうさとてめ
はるる古き室屋の終よいやしとてあはれみさるるあはれとてとて
しつとつりこしとてあはれ敷れあはれとて大原に大腹れあはれとて今小梅
山椒の音訓とてしつと○小あはれとてしつとけかつとてしつとあはれとて
田よしつととてしつと小草つり○うさ屋志摩は深難に此とてしつと○醜
島ハ薩摩とてしつと

うゆひ 倭名抄に遊仙窟に細腰とてしつとあり陳簡齋詩小柳送腰と
条左大臣親王外舅結御裳腰とてしつと○水左記に敦文春宮着袴也
関白殿結御腰給とてしつと

日幾回とんえとつり

こしらふ 日本紀に招慰とてしつとつり慰喻とてしつとつり新撰
字鏡に訓或ハ誘とてしつとつり知の義かへらふ及るは倭名抄にんこしらふ
つりとてしつとつり○今倭名抄に招慰とてしつとつり慰喻とてしつとつり
撫字とてしつとつり字也此をなすはつりすはるるつりつりつりつりつりつり
調茶也といふ製衣也

こしをれ 腰折也可れ痛といつり或はつりみちを漂とてしつとつり倭名抄に腰折文とい
る詩の事とてしつとつり是れ痛といつり玉屑に折腰体といふは此詩といふや
とてしつとつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
やかきまをさつりんもつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
る志志とてしつとつり五音集韻に心虚也といふは括とてしつとつり○瘡とてしつと
つりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
つりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

うがみ 盛衰記よりゆわのひを腰かみ此風結部と云々前太平記
もを人を罵てうがみの青侍腹あかみのか人ぞうかといひ弱兵此
もうらたぬぬかへ

うがみ 續千載集物名より腰刀此系古平造より九寸許れうらみ
平造裏記より七寸五分此ゆもるこり世に鎧徹も馬半差も脇刀と
しり明德記より此を服指と云り即刺刀にて武備志より解手刀と云へ

△こす 鈎簾と云り古語は十月鈎簾起るとゆかこすれ略なりといへ
とも多葉集の小簾と云みとこみひしと云り○此れおりのを濾及
濾字也紙のぬこ○こすれ常葉と云め不濾のこ野と云りこすは
某れ澁川也と云○紙もより又本も乃多あり○新撰字鏡は胞と云り
兒輩は多あり

△こせ 倍と云くこせくこせくといひ小狭のぬかへ或は苛字と云り○
源氏も多しと云いこす巨勢執后也金剛を相見たりて書を考す○こ
がさ風癪也一云古癪と云り或は小狭瘡と云○まこすけ五節條と云

てと云くこす小師也侍ひのつちらあ五のまかやと衣冠と云やとぬとの也
と云あり

△こた 古今集よりこたうこせると云ゆ源氏も多しと云り此れぬかへ
と云たりやもゆりといひこたうこせると云ゆ源氏も多しと云り

△こそ 萬葉集よりこ字と云り此れぬかへと云願多辭と云りこすこす
と云りやもゆりといひて下第四の韻と云り此れぬかへと云り又人こす
と云りやもゆりといひて下第四の韻と云り此れぬかへと云り又人こす

と云りやもゆりといひて下第四の韻と云り此れぬかへと云り又人こす
と云りやもゆりといひて下第四の韻と云り此れぬかへと云り又人こす

と云りやもゆりといひて下第四の韻と云り此れぬかへと云り又人こす
と云りやもゆりといひて下第四の韻と云り此れぬかへと云り又人こす

と云りやもゆりといひて下第四の韻と云り此れぬかへと云り又人こす
と云りやもゆりといひて下第四の韻と云り此れぬかへと云り又人こす

と祈請の亦存候乞字系をへり姓此古曾部も日記に社戸と書り比賣古
曾も倭名抄に姫社とあり式伊勢國奄藝郡大乃已所神社也今大
古名村とも三重郡小許曾神社あり今小社といひ多氣郡流田カミコ上社
神社ありを記す上許曾神社は訓同し○竹採初経は糞とともいふ漢こ
そといふ童の若袋草紙に記しありよ東つ流は信りともいふここの金幣中り
尼く右を君こそいふ流は又少婦こそいふ信り為系粒通の妻小忌古名
此名に九代実録に尼の遊女記に記しあり神崎遊女此名に孤蘇とあり
是はわたり貫之童名をいふここの信り同しわたり源氏に記しこ
そといふ宦女とありやまのつゝいふ信りといひわたり信りといふ信り
○宇治拾遺は流石菩薩と流石こそいふわたり

ここの信り 神代紀は擧字とありみ皇代紀は合字ありありをいふここの信り
ろといふ今もここの信りといひ物よここの信りといひ西上は奉世奉は奉系奉は奉系
ここの信り 小袖也大袖は對していふ下志此名礼服は記しありすはく薩戒記
よハ禮服は太袖小袖と奉り大双紙は小袖と奉りといふ也といひ

掌此衣ありぬつ巾袖ありといふともいひりよて全浙兵制の殿衣を譯し

○ここの小袖は衣種拾遺に記しあり

ここの信り 小反刃の義高館の草紙は長刀小反刃といふここの信り元弘建武

此はゆひ太長刀小長刀といふ是加へ

ここの信り 痒は此種とありいふここの信りといふここの信り

いふかといひゆいちりゆいれおの語格也といひ楞菴種は思躑懸屋足心酸

淡といふここの信り悲哀此事は酸鼻といふも鼻のここの信り○信り尻

ここの信りといふも足心酸淡のここの信りて尻鬢はみよといひ

△ここの信り 對答とあり言返コトカエの義とありたへす反ふは新撰字鏡に言

ももありここの信りといひへる反ふは○容忍は言ふもいひ事指しは言

ここの信り 日記に是行とあり物種は多し今度此字の後漢書に記

ここの信り 這番者回りといひ

ここの信り 源氏に玉狗とあり又記しここの信り木魂は彭侯是

也倭名抄は文選に本魅内典に樹神とあり延茂は本靈ともいひ

頭昭ハ山妻のりもとろ○倍は碎銀と小玉の○兒玉黨、盛衰は是の
 ごころ 物候は多くるより御等へ一河海は後漢書に注を以て後
 達此取といふと所見あり奉勅文粹管公此詩は閻荅稱辨御と後俗
 謂貴女為御蓋取夫人女御之儀也とるより後權集またこの二閑院はこ
 大和物候は伊勢の清君候此御ひがまればごころより伊料人といふもは
 へ一倍は母所姨所御清をといふもより伊所は父所見清をといふも
 より一倍はま名伊勢物候は兒達もま名は女をといふもは
 也濁りてよむハ音候ありとあり

ごころ 骨董此音あり一倍はごころとごころとごころと
 元也と閑骨董といひこ倍はごころと骨董肆といひごころと骨董箱といひ
 ごころと骨董袋といひごころと骨董美といひ西土はあはれ
 まる語録解義は閑骨董朽本也とるより
 △ごころ 東風をいふハ疾風ともちとよめり此は伊勢物候まごころと風と
 まる琉球ハおもちとあり○中國の船人云おれ風をいふごころといふ

月の風をいふハ入ごころといふはりハすづるといふはて九折はさうり
 申ハすづる早の出入はひより変りやまらへ伊勢物候は下總ごころといふ○倍は
 は方とよりら道の略あり○魚はのり鮫魚也といひ又牛尾魚也といひ
 たりお年尾列熱回より出ハ九尺なりと倍は穀を再とるより
 以籥字ハ倍の造まるふと許都奠此物さへ○此ごころたまふなり
 ごころたまふなりとあり又此也此物さへもといふもといふも
 ごころハ雲抄抄ハ胡竹也といひ律書樂圖ハ横笛本出於菟也といひ
 ごころ拾芥抄ハ長竹といひ又周禮ハ孤竹之管注ハ竹特生者といひ
 ごころは是も後拾遺集なり
 いっさきごころはごころといふも
 い方へあはれひうけごころへ一千載集もよあり
 ごころ 源氏ごころあはれごころをいひて又けごころと細ごころ
 こころはごころと細ごころは無骨也といひ○梶原景季梅丸を籠ま
 志て戦ふ時ハ敵方よりハ三位の信と稱しごころと唱ふ

景季續成て
いけりてんあはれとて

と長門本年ぬはるは足ゆ盛衰はあ服は梅を挿しとて父を討てたり

ららだて 万葉集又事痛言痛をてりといふなり也人なればいけりてみ
なるといふより源氏物語は納言とていふなりとていふあり○万葉

集り毛人髪三とあるなり毛人のえそ也そが髪れ多くていふなり
かゝるへも髪訓せり也源氏もみりていふなりとていふなり

△この 倍の藝は熟達するを骨をほりといひは肉はれりなりとて
代醉編は僧録書骨氣奇偉とていふ

この 詔こづ獨づの所聞の政ぶるなりといふ言為れりなりとて
この 日中紀秘記は甲冑はるなりといふ言はるなりとていふなり

△この 臂鎧はのぶるなり也といふ言はるなりとていふなり
この 弓矢はるなりといふ言はるなりとていふなり

いめりて針をさめとも針は鏝よりいへりといふなり○鏝といふは
このよりいへりといふなり

この 源氏のみかたは源氏といふなりとていふなり○源氏
此のよりいへりといふなり○源氏といふなり

この 蝶はるなりといふなり○胡蝶ハ音なりまはる胡
蝶といふなりといふなり○蝶はるなりといふなり

○胡蝶のみゆゑ唐明皇は故事○胡蝶は舞ハ壹越調は樂く多情玉
胡蝶猶自舞秋光なりといふなり

△この 事と言と訓同し相須て用ふなり也○語ハ事ハことなり
の者者字はるなり○故といふは縁故也事故也○易ハ蠱ハ事ハ序
卦ハ事也といふなり○神代紀ハ功ハ事ハ功也○同紀ハ台ハ事ハ
漢書ハ三公上應三公といふ大禹謨ハ三公曰三事なりといふなり

○緯とよむは漢書師古は緯事也讀與載同と云ふなり○
 ○江次分朝野群載骨と云ふ事あり首書は骨ハ事ハ事と云ふ事あり
 ○琴と訓むるは詔言シヨウゴン此書ありと略す也其名義ハ天詔琴のト云ふ事あり
 本とて造るハ古事記も及竹とて造るハ継体紀にも見ゆ日本琴とて琴
 此とて争はると琵琶此とて争はると一源氏ハ琵琶也アゆことこのり
 琵琶と胡琴ともいふ河川阿多とも王昭君ともあり
 乃て乃とて争はるといふは乃とて争はるといふをぬく事あり
 南都正倉院の所藏ハ大壺琴あり形琵琶に似く四弦也壺琴とて争はるといふ事
 終始抄ハ乃とて争はるといふ事あり壺琴と争はるといふ事あり
 ○琴此
 音ハ秋風と云ふハ秋風入夜琴と李嶠ハ夜琴と又琴曲ハ風
 入松ありといふ

琴此音と云ふ事あり今とて争はるといふ事あり
 呂氏春秋ハ鍾子期死伯牙破琴絶弦終身不復鼓琴と云ふ事あり○後撰集
 呂氏春秋ハ鍾子期死伯牙破琴絶弦終身不復鼓琴と云ふ事あり○後撰集
 呂氏春秋ハ鍾子期死伯牙破琴絶弦終身不復鼓琴と云ふ事あり○後撰集
 呂氏春秋ハ鍾子期死伯牙破琴絶弦終身不復鼓琴と云ふ事あり○後撰集

○琴此音と云ふ事あり今とて争はるといふ事あり
 呂氏春秋ハ鍾子期死伯牙破琴絶弦終身不復鼓琴と云ふ事あり○後撰集
 呂氏春秋ハ鍾子期死伯牙破琴絶弦終身不復鼓琴と云ふ事あり○後撰集
 呂氏春秋ハ鍾子期死伯牙破琴絶弦終身不復鼓琴と云ふ事あり○後撰集

彈箏峽此ことあり○

後名抄ハ箏柱とありがハ柱ハ音略ハ書言故事ハ柱ハ瑟上

鴈足也と云ふ事あり

白雲此流ハと云ふ事あり

○このことありはるる事あり

方集事ハと云ふ事あり

建絶妻之誓誠と云ふ事あり
 別は此義とて家と別と云ふ事あり
 天詔琴ハ史婦此表物と云ふ事あり
 方ハ一源抄ハと云ふ事あり

日本紀和名抄ハ特牛と云ふ事あり
 此牛也牡牛ハ此と云ふ事あり
 ○此の事あり 牡牛ハ三宅と云ふ事あり

殊異とあり事ありて殊異とあり也特とありもこれ多し
俗とあるとありて特也とあり俗俗と禮記と特と獨行と
俗とあるとありて(別とありも字此とあり人別家別也)毎字
とありびとありと譯とあり濁とあり毎各也とあり

如猶似若とありとあり自本紀万葉集とありとあり古
集ももえぬ句調此とあり略也似ハ詩詞俗語とありとあり
よハ相似也とあり同とあり用う讀如字とあり本字此とありあり

祝詞は言祝古語云許止保企言壽詞如今壽觴之詞とあり
又祝壽は言祝命とありとありの謬也

祝詞は言祝古語云許止保企言壽詞如今壽觴之詞とあり
又祝壽は言祝命とありとありの謬也

禁秘抄に如奉幣有辭別必奏草とありとあり祝詞は辭別
とありとありの謬也

言事と靈檢の謬也

志貴嶋はやまの事靈はたまはまきくられ
とありとありの謬也

坂川百とありとありの謬也

言割れぬ處分裁断は字とありとありとありとありとあり
説は物脉理惟玉最密故从玉とありとありとありとありとあり
色ハ俗ももえぬとありとありとありとありとありとありとあり
陳謝とありとありとありとありとありとありとありとありとあり
○日本紀に證之とありとありとありとありとありとありとあり
あめつらとありとありとありとありとありとありとありとあり
て重とありとありとありとありとありとありとありとありとあり
及理と承て許諾とありとありとありとありとありとありとあり

言此とありとありとありとありとありとありとありとありとあり

とほせしとせ也ととり

ととくく 盡悉彈畢とあり毎事此を盡へし俚語也其強也盡悉
此字ハ史倉公傳ニ欲盡以我禁方書悉教公と有り之看へし彈ハ通
て單ニ他ノ盡也とほす畢ハ之と有之此等ノり物也又詳説トリノ盡也
とく肩ハ書此後ノ索也と有りて索ハ盡也万葉集ハことトノこと
ととくく 万葉集ハことトノ事トシテハ伊勢物語ニ事トナリ
女トシテハ物終ニ事トナリハ記ヒトモ又カケテハ事トナリト
ととくく 万葉集ハことトノ事トシテハ伊勢物語ニ事トナリ
ととくく 文集ニ詞華似禰衡ト云々ト有之氏成ハ隱存記ニ
馬宮ニ遊遊ト云々ト有之

世傳ハ種ハ姓ハ色ハ如ク一色ト云々ト有之
ととくく 万葉集ハ相撲部領使防人部領使ト云々ト有之日本
紀藻
部領ノ事トナリ訓セテ事ト執ラセテハ
ととくく 相撲部領ト云々ト有之

狭間内取大尾橋等と云々ト有之此ハ今ノ地名也
守ト云々ト有之

ととくく 万葉集ハことトノ事トシテハ伊勢物語ニ事トナリ
ととくく 万葉集ハことトノ事トシテハ伊勢物語ニ事トナリ
ととくく 万葉集ハことトノ事トシテハ伊勢物語ニ事トナリ

△ことく 世方此ノカ反也○倭名抄ハ水田ト云々ト有之熟田ト云々ト有之
撰字鏡ハ壘ト云々ト有之易ト云々ト有之雷ト云々ト有之
ことく 日本紀ハ熟字ト云々ト有之粉ト云々ト有之
ことく 田ト云々ト有之稷ト云々ト有之○食ト云々ト有之
ことく 倭名抄ハ前書ト云々ト有之
家集ハ云々ト有之

とよみくろ何れ扱るもやぬらう○熟妻或ハもつめとあり

△こがさ 倭名抄は鍊とあり又糝とあり字書は糝以米和羹也といひ鍊糝也といふ粉糝摺雜るれば米糝とて菜羹は和とて杜子安

△こまハ 小庵とあり解は此南庭とあり

△こぬ 万葉集は正性とあり今あるぬといふはなり

△こゆふ 挽とあり粉糠のまわり細糠ともいふ

△こゆふ 浚とあり字彙は水調粉麩と云ふこゆふ粉練のまゝ泥土は

りも同一埏埴と云ふこゆふと云ふは也○人れはりくつと云ふ

りこゆふと云ふはりこゆふと云ふは也○人れはりくつと云ふ

△こゆふ 是此とあり是と云ふは変訓はと云ふは正訓論語といふ多く斯

りゆと云ふはゆと云ふは也○之と云ふは子之人の

用ゆと云ふは是故と書經は茲故はゆ○之と云ふは子之人の

なり○者ハ増韻は也と云ふは俗語は此箇者箇通用○ゆと云

様は其様と云ふは也と云ふは俗語は此箇者箇通用○ゆと云

このい 好樂とあり嗜好のまじ新撰字鏡は嬖又媼又嫫又倭然とあり

○物事は就てはみといふは西土は譬合といふ○このいどと云ふは好善

喜喜皆なり一語字は也○ゆと云ふはりこゆふと云ふは也○

こ乃み 神代紀は菓と云ふは古事記は本宮といふは應劭云本實曰菓倍

さる天照大神此のうみ也といふ事といふ人あやといふ源氏又妙とい
とらうといふ例もや古事記より素尊此語も吾者天照大御神之伊呂勢
者也といふしと据也○和名抄は水腹といふり今こがみといふ又やがみ
といふ○権左史をいかにみとせらるるを流りといふ

このまみ 柳菖織のみゆ晋代王子猷う何可一日无此君邪といふり
竹の吳名とあまら也勅干載集り

万代はあまらつしは君とわがけはるる園乃とまこけ

このまみ 本苑の系神代記は本花開耶姫は名なり禁河のまよふ
橋のまよふとゆめり古事集此序は橋をといふり流りまよふ系集り
橋を今さうりありありはまよふらみわらてらるるまよふといふ

かまの王仁の奇とあまらつしは王仁の奇も橋をといふるまよふを
乃百椿園序は凡日本はまよふ橋をまよふといふ中此はまよふ
昔ハ梅とをまよふといふまよふといふも古と序は振て誤るとい
ありといふ梅ハ山生のとまよふといふ西王よりわらるる梅といふ

このまみ

このまみ

比乃頃属間宮或ハ間者頃者なりといふ靈異記は此頃といふ
相列記は繞川行舟遙望若一樹葉彩拾遺集り

このまみ

浪れといふ漕つりいふかを風よりまよふといふ

このまみ 兄部といふりかういふかみの橋く力若の路といふり
もいなり朝野群載國務の條も其儀政所兄部といふり○伊勢
大宮司は司中兄部なり司中属官は一膳といふなり○伊勢
熱田もいなり伊勢年中新事も物忌父兄部也

このまみ 神代記は所記といふり通鑑正誤は故兼上起下之辞
猶言所以也といふり

このまみ

本家此文は系伝人のかへ橋の待と贈といふ

このまみ 此面彼面といふりといふと流波といふまよふといふ
といふ後推集りもあまらつしはまよふといふもかまといふも
秋序はみかまといふもいふもいふもいふもいふもいふも

このまみ 万葉集は本晚茂といふり本此は書は系也といふ

みともあり重法とあり又ふれがらうらむらぬわらふ

これゆつげ 神代紀は一兒とあり古事記は子之一木とあり

このまろぶの 神樂前よりあり本丸殿とあり行宮は仲多岐の金倉を

らりをぬの藻飾とあり金倉とあり本丸殿とあり仲多岐の金倉を

倉しまらわのたまらふとあり如く金倉とあり仲多岐の金倉を

多しつらわいかにちまらふとあり仲多岐の金倉を

△こい 此れはつせぬはつせぬとあり仲多岐の金倉を

伴健峯に談抄はつせぬとあり仲多岐の金倉を

とや○蘭此れはつせぬとあり仲多岐の金倉を

こいー 剛強といふ日本紀は梗とあり仲多岐の金倉を

る如へー石んおまてはつせぬとあり仲多岐の金倉を

こいな 日本紀は喬字孫字跡字とあり仲多岐の金倉を

こいひ 倭名抄は強飯とあり字ハ史廉頗傳はつせぬとあり

源氏ももろとあり海人藻芥は強飯とあり仲多岐の金倉を

と蒸とありい姫飯は今昔記といふや今昔記はつせぬとあり

つ不ぬはつせぬとあり尾を色はつせぬとあり

と七月十日はつせぬとあり

いぬー石ん又白飯石といふが精芽を合てたつせぬとあり

△こい 戀ハ人情の切實といふ乞求はつせぬとあり

和奇はつせぬとあり四季はつせぬとあり有天地然後有男女はつせぬとあり

浮橋はつせぬとあり諾冊唱和はつせぬとあり

此れ情實とありお若もつせぬとあり

△こい 恋ハ人情の切實といふ乞求はつせぬとあり

い奇古今集流とあり姓名はつせぬとあり

万葉集はつせぬとあり相聞と載て姓名はつせぬとあり

みやびをかつせぬとあり五倫はつせぬとあり

念百とあり

いなりと名考は後し看ハ信子此考と君父の不是底とわつらふは海
ありて旨と理合一故へ一捨違某人丸

信子これ信子と名考は後し看ハ信子此考と君父の不是底とわつらふは海

至忠の信ありとつらふは男女此信風を奪り根藪は流さりて海を
あつらふは戒むへ一信探集

人考は信子と名考は後し看ハ信子此考と君父の不是底とわつらふは海

朱子自警此詩は世上無如人欲險幾人到此誤平生とらふあり○志塚
ら山城乃名考は後し看ハ信子此考と君父の不是底とわつらふは海
奥衣川は家考は後し看ハ信子此考と君父の不是底とわつらふは海
詳は信子恩考は後し看ハ信子此考と君父の不是底とわつらふは海
芥子より信子と名考は後し看ハ信子此考と君父の不是底とわつらふは海
坂より信子今林氏の碑の立一信子と名考は後し看ハ信子此考と君父の不是底とわつらふは海
景行紀は信子と名考は後し看ハ信子此考と君父の不是底とわつらふは海

いなりと名考は後し看ハ信子此考と君父の不是底とわつらふは海

又六つ変成九つ鱗此の信子と名考は後し看ハ信子此考と君父の不是底とわつらふは海

て六つ魚此名考は後し看ハ信子此考と君父の不是底とわつらふは海

別名と名○新考は後し看ハ信子此考と君父の不是底とわつらふは海

一信子と名考は後し看ハ信子此考と君父の不是底とわつらふは海

異之考は後し看ハ信子此考と君父の不是底とわつらふは海

ひさみと名考は後し看ハ信子此考と君父の不是底とわつらふは海

魚と名考は後し看ハ信子此考と君父の不是底とわつらふは海

かこひぬらうかきんぬぬのあをきりふんぬぬぬ

富士山のふりまこひ池村たりま里人皆は病ま程さう池たりてこひ池
と名くけあをけうあえ池水の若もけ池まて足も池へい病と地とそ
但馬必養父池まも奉けい病と交ら池たりともこり又薩列のまふま
川りり池る若も足腫るととり砒霜石の池たりも池まも瘡水も池る
若も腫と病といひ病源候論まい池池法山縣ま人多腫と病ともんえ
淮南子ま下氣多種とより○こひの杜の伊賀阿拜郡也忘れ穴の解彼
中より忘れ池潭の河内高安郡より業平此故事を修め

こひ 媚とあり忘るうこり及び也女倍の清行の語まこひさう辞とん
えさう新羅字鏡ま嫵とさうとあり○南都賦ま盡媚字とさう詩
ま無為夸毗源ま夸毘屈已卑身而附人也ともんさう○焦飯まよ
こひら 倭名抄ま泥と訓さうむらともんさう六法まあへさうさう
忘れまさうせり

こひのむ 祈請のま万葉集まんぬ

こひ乃やま 忘れさう思ひのつらま又誠中またりさう又お湯ぬ

こひの一名ませいりあうくハお雲風まにまらさう○源氏ま忘れさう穴
子のさうまといまらさうも名ま昔よりま草まよひ傳へさうさう

こひゆふ 希顛冀字まあり同音ま乞願のまなり又こひゆふハハ
ありまらま又度又幾又度幾まあり度ハ形辭也幾ハ近辭也形
字此ぬ一説まむハ詩乃源ま幾也まんぬ幸も助信ま用らまら
顛也と注さり

こひのやうこ 万葉集まんぬ忘れぬ乃まらまらつらまららあり
法苑珠林女淫と注まらま為欲所使為奴畏主とんえ菩薩呵色欲法
凡支重色目為之僕とも親音賢經ま色使所使為息愛奴ともんさう

△こひ 乞請まのハ來經のまぬへ○各國の府舎らるを密府といふ
倭名抄まらさう今まらさう伊勢の密府ハ三守都より国府東被河
ハ朝野群載まらゆ寺ハ寶朝卿尾列大野浦より勢列地演まら岸此

夏五月... 雨雪... 北海... 水海... 韓語... 國勢... 難波... 延天... 日本... 破字... 壞字... 論語... 障字...

延天下... 評給時... 郡... 評... 日本... 破字... 壞字... 論語... 障字...

氏やうにわが神此音ゆいり新撰字鏡は馬とがうとあり
こやうにわがこ 東坡語は氷蟻不知寒火鼠不知暑といふをかり

△こは 駒とのふル雅注は小馬也といふゆ駒は信列也福嶋此上方より
ゆれはよ物此形をうたなりきよとてこれ海をうけをなゆるといり

一説は天平中は信乃国献神馬黒身白髪尾とてこれには据る名こ
とあり○高麗を訓とて括るとい物より物といふも彼此方言ぬへい

ともいり柏は狼を似て羊を驅の獸なり唐は渤海郡といふ○獨樂といふを
高麗より取らるる日本記は高麗は軍兵被舞興樂といふ樂ここまて訓をり

倭名抄よりこまつらと訓をり字拾遺といふ海つらといふ唐こまは惜
千と也といり○象戯此こまは西土も馬といふ○三弦は柱といふとい

おも象戯といふをぬへい○猫といふこまは和名抄よりぬ福は海は略
なり○本間此をり小間此をり○駒城は下徳ふより源頭信は高

師冬を攻一所あり
こはの 小松といふこまはうみとて万葉集より松とあり新にも拾遺集より

こまは 松といふこまはうみとて万葉集より松とあり新にも拾遺集より

○小松原新よりあり字はぬ一馬よりあり伏兔と髻着甲此間なりといり

○小松將軍は平信孝也○小松内府は平定盛公は源中は身小松を殖

させらるる六浦屋此東南小松谷に遺する名也○小松の峯は葛野郡鳴

瀬村よりり○小松の森は葛下郡也此片岡此小松の森なりといふ

こまは 細といふこまはうみとて万葉集より松とあり新にも拾遺集より

こまは 細といふこまはうみとて万葉集より松とあり新にも拾遺集より

こまは 櫛といふこまはうみとて万葉集より松とあり新にも拾遺集より

櫛木在縁之端者といふこまはうみとて万葉集より松とあり新にも拾遺集より

こまは 栢といふこまはうみとて万葉集より松とあり新にも拾遺集より

東大寺北南門に在るといふこまはうみとて万葉集より松とあり新にも拾遺集より

のこまはうみとて万葉集より松とあり新にも拾遺集より

火蘭路命は故事神代紀より常をぬはる大鹿をこまはうみとて万葉集より

乃こまはうみとて万葉集より松とあり新にも拾遺集より

乃こまはうみとて万葉集より松とあり新にも拾遺集より

乃こまはうみとて万葉集より松とあり新にも拾遺集より

ニワヤクニノ抄草紙ノ事ニシテ師子ニ使ハルルニシテ類聚雜要
 又九師子於色黄口開右胡摩尖於色白不開口と云師子此口と云ハ玉を
 含メテ故也といフ御即位此付承明門此左右ニ銅犬を置セラザルニ
 是ヤウ遊仙窟此牀頭玉獅子此後玉以至刻為獅子安牀頭避息魅並
 得鎮押氈席と云々ナリ狛犬ハ唐書ヨリ大鋪ノ如ク所簾此亦玉簾
 鎮と呼云是也神社ヨリ亦同ク一説ニ角ヲ狛犬ハ獬豸角有死ハ天
 祿ヤクニト云リ○倭名欽曲調於狛犬ナリ

ニハぬく 拱ニテありト云テ經貫此處ニハぬく袖ニテありト云テ
 是ヤクニハぬくト云テナリ
 ニハツラニ 万葉集ニ狛劍和さみか系トツラリ劍此環也式比伊勢神寶
 此中ヨモ玉纏横刀頭頂著朴鏢一勾ト云々ナリ厚地草ニハ狛劍ハ柄
 木クテ輪ノツラニありト云々ナリ杜詩ニ何由大刀頭ト云々ハ頭ニ環ナリ
 環ハ還也此ニテハナリ
 ニマヒカヘ 約迎也八月乃像或ハ法書此收テ牽テ馬ト云云云

ニハツラニ 万葉集ニ狛劍和さみか系トツラリ劍此環也式比伊勢神寶

ニマヒカヘ 約迎也八月乃像或ハ法書此收テ牽テ馬ト云云云

ニハツラニ 万葉集ニ狛劍和さみか系トツラリ劍此環也式比伊勢神寶

ニマヒカヘ 約迎也八月乃像或ハ法書此收テ牽テ馬ト云云云

ニハツラニ 万葉集ニ狛劍和さみか系トツラリ劍此環也式比伊勢神寶

ニマヒカヘ 約迎也八月乃像或ハ法書此收テ牽テ馬ト云云云

ニハツラニ 万葉集ニ狛劍和さみか系トツラリ劍此環也式比伊勢神寶

ニマヒカヘ 約迎也八月乃像或ハ法書此收テ牽テ馬ト云云云

ふる市幼輕掛村坐神社と云々○池尻属輕子村と云々○天荒や神の社此齋槻イヒナギ幾世までらん隠しカクレ婦メをも

○睚又睚と云ひ小襲此肉此少くはつまるをいふ如へし新撰の隠は蹲もよめり又こぢうともんこり潰ぬますかきと云伊豫よふつと云ふよふくらんこきと云中ふよひうまがと云備中此俗志やづと云るなり脚肚のこまり

んでい 健兒の轉音也日本紀よりかうびと訓せり唐六典も天下諸軍有健兒と云ゆ日中もそ製衣と用ゆるれり平家物語よんでいもつと云り今時武家此是種此語也と云○下学集も健兒所は中る此所居と云んこり○まよひの視蹄と云り

△こめ 巻と云ふ小字此巻へし八本と云ふも東鑑よんこり麝香もろり光種也と云り○室所為日記より石まつと云トおと云ゆ今と云よかりと云り○倭名抄より韶陽魚と云り貞似驚無甲口在腹下者也といひ今いふえい如へしと云り○古今集よこめやふおひかかると云

ゆるの本めこれなり○妻よめ香よめ根よめむよめ車よめねと云いふゆるめれなりと云り○倭名抄よ穀と云りそ文此多れと云なりなり新撰の隠はこめ乃さねと云んこりかたり此語もて今ありめんよ細て此の綾也穀織と云いふ

△こも 和名抄よ薦と云り小編此薦よ延と云式よ長薦も薦折薦茅簣薦い此也よ羽薦食薦簣薦と云んこり鎮江府志よ黍蓬者野茨也不結実惟堪薦藉故曰薦と云ゆ○菰と云ひも薦も用と云なり蔣も曰し韓子は蔣席と云ゆ○和名抄よ菰首と云ゆつのもこもあつろともめり水と云ふ流あつと云んこり菰封と云んこり○倭名抄よ海蓐と訓せり古事記よもえゆあつと云んこり細て此の多くつあり壽藻也といひ小藻此如へし著園集よこもこのことかあよ志と云んえと云はつと云んこり也訓は薦子と云んこり

こころり 古今集よあの子と有つれ今も幾人れ子とありたり
源氏よ子也れ君ももるこころり今も田舎詞は婦とこころりと梅と
既よ若菜集よんゆ

こころりえ 伊勢物語よんゆ名本よ梅はととこころり芦花中よこころり
こころりふ ○美奈集りよめ入にありさの隠はの美水隠りて
ふふといわたり ○泊瀬の梅はよめるハ口字れは字は然これ隠り
也と歌昭の伝

こころりく 泊瀬の梅はよたり万葉集よ隠口隠國隠来るとこころり
泊瀬の口方はふれ立めたりて隠りたりて隠は隠は隠は隠は
或ハ口の歯とつけたりともやう長谷ととてとつせととめもい
ぬへとこころり ○蜻蛉日記よ泊瀬まうくよ音せでわたり美奈集よこ
ころりにあかましくこころりかま面とたりこころりれ人れはこころり
とつてとせんこころりこころりこころり音せでわたり美奈集よ
りまあるとこころり美奈集よ隠はとこころりこころり世隠りこころり ○後或集よ許五理

国志多備乃國といふも隠は下梅は也伊勢集よ歌下樋小川とこころり
こころりこころりけこころり許五理國の國ハ國なり古事記よ許五理とん也隠水也
こころりこころり 薦花也よ歌高橋かとこころり高橋とこころり今も
安部とこころりこころり梅とこころり系奇とこころり ○三代実録よ法苑寺薦花
高河産栖且録とゆ ○伊賀阿拜郡よ薦花梅新たり ○薦花川ハ即こ
川なり隠と歌よこころり

△こころり 是やの美又事やとこころりひわけとこころり梅はとこころり人れつと
城とよめりハ處の名れ胡陽とこころりこころり池の魚ハ偏目也とこころり ○倭名
抄よ助鋪とよめり万葉集り小屋とこころり名の志はやなとこころり○安
徳帝の内里内裡と昆陽野は造まるとこころり了の谷の戦り範頼陣也
こころり こころり同一展勝の古語也日本紀の奇とこころりやせかこころりこころり
万葉集よ所首とと太子修と一文字と用わたり古事記よつくられと
海といふもこころりこころりこころり

こころり 萬葉集よ古堂といふこころり小屋堂れ美奈集り朝名の奇り

人よりぬかひのふけのふたはる量よりそあつとせりあふ
くやで 万葉集より椎のくやでなごりめり小弥出此取くや又くやと
乃指ありともりり

△こゆ 踰又超越とて新推字法は躰もよりこえふともいふる
ゆかりこよともいふすとゆとをすあまはあへり○肥とむも
り穢とむもいふとこよともいふとあへり

こゆひ 小結の衣烏帽子懸のふりこすまらふ白くあつく
あ組の刀は結より細さを烏帽子懸はまらふはとも細度
あ組よりこりけ付の夜の字とづの青は唱あまの古
あ組とこり

△こらみ 暦日といふ日漢の義二日二日とかさへて
なまは名とせりなり 欽明天皇は此の暦本とらみ
めり北山抄は土倉抄を奏御暦と云ゆ○北史は突厥不知
暦惟以青草為記と云ふ唐詩も山中無暦日寒盡不知年
も田家無五行水旱ト蛙聲ともいふ五行ともいふなり
○阿蘭陀の暦の日と表は

月を表はし一年日数二百六十日ありて正月終るを
まて二月八廿八日なりと四年は一度廿九日と一日の
日○舊唐書文帝紀は敕諸道府不得私置暦日板と云
なり○常世抄終は暦此軸と云ふなりゆりぬきと云
なり

今幾日志のあはれ月も表はしとてあはれ暦の奥は
宗祇の詩は暦尾無餘日といふことなり○かあ
まらふとて京師大禮解と云ふ伊豆の地と云ふ伊勢神
と云ふ○暦博士は欽明紀は足由幼解由小路在富
の人也去序のあはれの事也○貞享暦は貞享元年詔
の大統暦と損益して造るなりとて淡川春海の功也

こらみ 海内は足ゆきと云ふことなり河海抄は無
沙抄は事以外の事と云ふことなり申務集
こらみ 海内は足ゆきと云ふことなり河海抄は無
沙抄は事以外の事と云ふことなり申務集

△こり 一万余集りいざや子等と名こり女とこのよあざうへんもの多の
 ○神多こり此館有り子良とあり永正記も子等母良とも名の作は
 神多所と呼ひお子良子とあり物忌の子也館ハ物忌父子齋宿の館也儀式
 帳よあー○新撰字鏡よ録とあり字訓とよふの如く
 こりす 懲字とありらす及るこ凝より如くつる如くへー

△こり 修は行旅の麓子といハ行李とあり書言故事は行李ハ遠行
 必有行囊也とあり或ハ骨柳とありやあざうりも本草は取其細條
 火逼令柔屈作箱篋といつる者あり○信よみまにらるをこりをかこり
 儀と名こりささこり又垢離とあり無量義經ハ水能洗垢
 穢と名こりささこりの香は美和氏此香水より如くつる如くへーかこり
 かこり此略語也○條垢離といふもゆき○心とむ田心姫命なり
 こりまは 地よ不懲れこり多の須ガの浦まは海人さよひひけさ
 まいさへつる如く一万余集りあざうりて成あす海よとてつる如くへー
 屋り一は懲どもひすといふこりまひハ逗通とあり古今集り

こりすはまもこり名をまぬへーんゆかぬあつとまひ
 こりたさ 延喜式志例ハ堂標香焼とありこり一万余集りも香陰流塔
 こりあり目録紀ハも焼香とありとたさくと刈せりこりの凝烟ハ訓あさ
 屋一増一阿含經ハ香為佛使故須燒香遍請とあり九そ神ハ心を
 してあつといふのあさと香はまはんとて佛堂とかく稱をり四方
 拜をり番れ事りる皇極紀をり此海世の事あり
 こりさうらる 梅をりこり凝煙はあひつるを凝煙舎といふかへー
 △こり 凝とありこりともり古事記ハこりささこりともり
 色韻也○懲もありらるともり○本こりの万葉集ハ伐字こり
 あまこりいひあまかるといハ套語也常とあまをせり奇よ多く懲
 りよせり

こりつゆ 姦穢或ハ若詠冬時こりつゆはこりをこり凝煙はあまへー
 △こり 此ハ彼と對ハ是ハ非と對ハ日といハ雨ハ正ハそ自とハ是日と
 いハ附と上文ハ既ハそ自成わつるをれさうげといハ俗也とより之斯茲

繫伊侯をとりあり毛詩の多く維を尚書に多く維を用うるを
一寔は伊侯是也と名ゆ書經の時もあり穀梁傳は伊侯諸ハ之也と名
梅も諸は同一と名なりとむ直とむハ史正義は語發聲也と名ゆ這
とむハ俗語也簡も同一

こまより 神代紀は自餘と云ふより伊侯よりと云ふ自餘と云ふより此れと
あり自是此なり

△ころり 日本紀は間字比字頃字なりとあり史の黎明を云ふころり
む索隱は黎猶比也と名ゆ漢書は暹明は伊侯也且もはくるころりと名ゆ
月ころり日本近來なりと名ゆころり音を云ふ○万葉集より自と云ふり今
と自然なるころりといふは伊侯も源自明と云ふのころりなりと云ふなり○同
集亦新は子孫と云ふなり○同は伊侯は伊侯四字もより埃囊
抄小兒翫物の中は肚と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり○日本紀は西
字もより○黎は伊侯と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
ころり ころりといふは伊侯なり反轉はと云ふ○瓢箪ころりといふは伊侯と

壺盧といふは伊侯と混沌なりといふハ圓体よりいふは伊侯なり

ころり 神代紀は噴讓と云ふなり万葉集は自臥と云ふなりと云ふなりと云ふなり
と及び展卧の謂也○本は伊侯の實より伊と云ふなりと云ふなり○耶蘇の外
道は入るるの佛は伊侯なりと云ふなり轉の義は伊侯一語は刑は行
つるるの多けは伊侯に入つて置り頭は伊侯と云ふなり帰服也若き依
と云ふなりけけと云ふなり伊侯なり

ころり 展精といふは伊侯の令精は伊侯なりと云ふなりハ倭字也應仁紀は伊侯
と云ふなり 日本紀は誅殺と云ふなり枯は伊侯語也又ころりを伊侯は溝壑なり
伊侯は斬戮又斃もといふハ伊侯は度劉もなり○伊侯は伊侯の勅死也
ころり 衣といふ服物の義は伊侯なり万葉集は服と云ふなり日本紀は衫と云
ふなり今俗は衣と云ふなり伊侯人藻芥は伊侯語也直也と云ふなり○衣
と云ふは伊侯の義は伊侯なりと云ふなり伊侯は音と借は伊侯なりと云ふなり

○衣といふは伊侯なりと云ふハ厚薄は伊侯なり○伊侯は伊侯の伊侯は伊侯

母をありきき音を聴くこととて奥列たるも川に交藻川と云
て夜関ハ岩瀬の郡より安倍頼時より紀伊より平鑑より源
義家衣川の戦は負任敗れて走り追及て曰
衣は看ハかろひあり

負任馬を駐めて

年をへし糸は此は苦しきなり

義家其對感一を致して帰る著聞華よりなり衣浦ハ尾列御
初横須賀此事なり

志願くくつた衣浦浦子音なり音はつち袖ぬらすん

○衣う海ハ訪諏の湖よりなり

信法より衣う海よりして富井とてく蟹はつち母

まふ集りた衣う海よりして毎四月甲斐の玉と為てつち衣二此

山氣御水よりなり○衣は海ハ赤澤山の集りなり駿馬山也

衣う海ハ 伊勢御経より衣う海は近字と義訓なり常は比字なり

ゆりいさかひをいさかひなり同し貝糸此は海よりなり
比及三羊を正義は比至とつちいさかひなり
衣字書ももんをいさかひなり○句も衣も衣なり一旬ハ十日
なり衣権衣若詠句時なり衣は衣なり
衣く 万葉集なり衣は衣なり古事記より衣自轉は衣
又楞嚴經ハ孤露の字なり衣権衣なり

ハ少女此振て衣玲の衣なり衣は衣なり

○衣く衣なり衣の言言故事は掩口笑曰胡盧と云え通雅ハ盧胡笑

在喉間也と云なり○演義文ハ骨碌と云なり

衣く 倭名鈔ハ嘶咽と云なり色は衣なり

衣を衣 衣は衣なり衣は衣なり衣は衣なり

衣は衣なり衣は衣なり衣は衣なり

衣は衣なり衣は衣なり衣は衣なり

衣は衣なり衣は衣なり衣は衣なり

ころもあでうら 栲衣よふあり繁打はあけとと韻通也○月下擣衣の
影は白氏の南樓月下擣寒衣の句よりなり栲衣は影を待人とありあまを
擣せり杜詩君聽空外音李詩良人罷遠征は影と

△ころ糸 聲音此糸なり

ころたう 越仙窟よ大語をありふ糸は奇よもるころを言ふは影と

ころゆい 新撰字鏡よ咆休又咆勃とあり糸はさきあり

△ころぬ 鷹よいふ糸居たぬと雲は本居推此本居回意とあり○糸玉
集り糸をさる多とあり

△ころゑ 色音といふ言難は糸あり○西土よ糸を言ふといふを言ふ
秋風の糸を言ふといふ言難と評せり○足利又太郎忠綱は呼ぶ坂東
路四十里は関ゆ長七人力對百人と糸は進よとぬ

ころたわひひ 糸はたわひとあり糸を言ふといふあり

△ころんぞ 小御衣は糸着の糸也地は糸也といふ

ころあぶい 倭名抄よ李指と訓せり今糸信といふといふ

ころあさみ 小糸君とあり重明親王の女なりとあり糸はあさみなり
拾芥抄よ三條院坊の沙村女糸人左近といふ一人なりとあり一
糸は糸を物種よ糸は糸女糸人小糸進此君とあり糸は糸なりともあり
糸は小糸は君と呼べといふとあり糸は糸なりとあり

御書
 卷之六
 三



